渡　辺　凱　一（わたなべ　よしかず）

昭和15年2月21日　水戸市に生まれる。
文芸批評家。「関西文学」特別同人。「作家」同人。
主要作品『新攷荷風文学』（共著）『有島武郎』（飛島書房）『晩年の有島武郎』（私家版）『青い葡萄の実―旅と文学』（私家版）。『作家の自殺』（現在連載中）。
その他論文多数。

検印
省略

エッセイ集『青い葡萄の実―旅と文学』

昭和五十四年八月五日　初版印刷
昭和五十四年八月十日　初版発行

二、〇〇〇円

著者兼発行者　渡　辺　凱　一

印刷所　明宏印刷株式会社

発行所　埼玉県浦和市北浦和二―三―五
著者宅（私家版）（〒三三六）
電話（〇四八八）三三―三八八〇

エッセイ集

青い葡萄の実——旅と文学

渡辺凱一

父

に

捧

ぐ

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

目次

第一章・旅のノートから

伊豆・冬の旅……6
藤村と小諸……10
木曽路ひとり旅……13
道南の旅……18
有島武郎の終焉地を訪ねて……24
雷電海岸と木田金次郎……27
ふるさとの海のほとりで……32

第二章・有島武郎とわたし

山田昭夫氏に……36
有島武郎とわたし……40
新しい出発点……46
有島武郎の魅力……50

第三章・文学随想

漱石と現代……56
年齢と成熟……59
太宰文学の魅力の秘密……61
生の本能の追求……65
――「桜桃忌」を前に――
亀井勝一郎氏を偲んで……68
ある愛の形見……72
父の孤独と家庭……75
批評の愉しみ……78
『司令の休暇』をめぐって……81
読書の秋に……85

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

市民の文学空間……88
『新故荷風文学』について……92
評伝を書く愉しさ……94
荷風と妓女・イディス……98
新春雑感……102
人間関係の回復……105
近況……107
正視に耐えぬ……109
阿部信一著『有島の里』……112
竹森一男著『戦争』を読む……114
ものを書く根源の意味……115
浦和——第二の心の故郷……118
「かたらい」と「標結」の人々……121
ある連載を終えて……124
龍之介と荷風……126
邪悪な想像力……128
自殺作家の謎……132
自費出版の運命……136
あとがき……143

第一章　旅のノートから

伊豆・冬の旅

先日、ぶらりと下田から石廊崎をめぐって来た。伊豆へは年に二回ぐらいでかける。信濃路、木曽路とともにわたしの好きな場所である。

伊豆は、地震以来、観光客が激減したという。それは確かなことらしい。冬といっても伊豆の冬はあたたかく、関東では南房総とともに春の花が最も早く咲く温暖の地として知られている。

伊豆急で午後下田に着く。去年の秋は下田からマーガレット・ラインで子浦に向い、この入江の漁港の民宿で一泊し、翌日、船で波勝崎から堂ヶ島をまわった。その時の船旅の素晴らしさは忘れられない。

下田ではまず、駅に近い行きつけの喫茶店にでかける。およそ、どこへでかけても計画というものをもたないわたしは、気に入った喫茶店で休息しながら旅のプランを練る。熱いコーヒーをすすりながら、店内に置いてあった伊豆下田めぐりのパンフレットを見ると、爪木崎の野生の水仙について書いてある。時期的には少し遅いが、灯台も見てみたい。が、今日は時間的に無理なので明日の朝でかけようと思った。下田からは石廊崎周遊の遊覧船が出ているが、こ

れにはまだ乗ったことがない。明日はこの遊覧船で石廊崎へ行ってみよう。冬の伊豆の海を船で眺めるのも悪くはない。花の旅、海への憧れ、と呟きながら、いい齢をしてこれじゃ中学生の旅行と大差ないかな、と思わず苦笑をもらした。

しかし、それも悪くはない。現実と鼻つき合せて生きていると、しばしばロマンの世界へ脱出したくなる。これは太宰治的なのだが、太宰的であっても悪いということはない。疲労が重なれば休息が必要なように、人の心もやすらぎを必要とすることがある。去年の暮から、ほとんど休みなく酷使してきたわたしの心は疲れ切っている。海と花々は、わたしの心を和ませてくれるであろう。

駅の案内所で旅館を紹介してもらい、海辺のホテルに投宿する。値段の割には部屋も良く、夕食も豪華だ。わたしの好きな「海の幸」が食卓に並ぶ。客は本当に少ない。いつもならショーもあるそうだが、それも中止しているという。旅に出てまで俗っぽいショーなど見る気もないが、観光地の不況がしのばれて少時考え込んでしまった。

夕食後、風呂で躰を温め、好物のイカの刺身をとり寄せて夜の海を見ながら酒を飲む。静かな夜だ。心も静まる。ウィスキーを飲みながら、もってきた透谷集を読みはじめる。透谷というのは天才だと思う。日本の近代の夜明け前を、彼は慧星のように疾駆し、一瞬のきらめきを遺して自殺した。わたしは、透谷から有島武郎へ繋がる文学の継譜ということを去年から考え

ている。これは難しい問題だが、論証できれば近代文学史に一つの視点を与えられると思う。透谷集を読みながら、その構想を検討してみる。それは楽しいひとときだ。

翌朝、八時起床。朝食はヴァイキングだ。だが、あんまり食欲はない。ホテルのマイクロ・バスで下田駅へ。そこからバスで爪木崎へ向う。約十五分位で水仙の野生地へ着く。

なるほど、見事な野生地だ。海辺に続く一帯は、すべて水仙で覆われている。可憐な小さな白い花の群れ。潮の香りとともに、その芳醇な花の香りがあたりを占領する。海からの風は冷たい。しかし陽射しには確実に春が感じられる。水仙の茂る道を縫って続く道をたどり、灯台に向う。白い灯台からは、紺璧の海が一望の下に見渡せる。

沖を、船が走る。崖に波しぶきが立つ。何という素晴らしい景観だろう。空には雲ひとつなく、空と海が青に調和し、自然の偉容を沈黙のうちに示している。人間のすべての営みが、この大自然の前では卑小だ。呆然としてわたしは自然の前に立ちつくす。意味論の世界は消滅し、原初の世界に心を奪われる……。

下田にもどり、遊覧船に乗る。乗客五人、これでは商売にはなるまいが、わたしにはありがたい。石廊崎までは五十分の船旅だ。船室には入らず、船尾のチェアーに坐り、風と波しぶきを受けながら、景色の移り変りをながめる。ふと、詩人・生田春月のことを想起する。彼は月の夜、船から夜の瀬戸内海に飛込み、命を絶った。今、もしわたしが海に投身すれば、一、二

分後にはわたしは確実にこの世を去ることができる。危険だな、と思い返し、わたしは煙草をとり出す。

石廊崎へ着く。ある茶店でコーヒーをすすり、暖をとる。その店の人なつっこい女の経営者と話をする。やはり不景気だと嘆く。つぶれる店も多いという。クミちゃんというお座敷犬が、カゴの中にチョコンと納っていて、何とも愛くるしい。さざえを注文して食べたが、二ヶ五百円という値段には少し驚く。が、これも時勢であろう。

海岸通りを、ぶらぶら下田の方に向って歩く。鷗の舞う姿が美しい。何となく松島に似ているなと思う。街道沿いに「花狩り園」があって、ストック、エリカ、アイリス、菜の花が咲きほこっている。さすがに伊豆だなと思う。エリカは、近くで見ると味のない花であり、その名称の方がよほどロマンティックな響きがある。麦も花の一種に数えられているが、わたしは勝手に「花麦」とよぶことにした。まもなく下田駅行のバスに乗り、夕方、下田から帰途に着いたが、短い二日間の伊豆の旅で、わたしの心はかなり軽ろやかさをとりもどしていた。

実朝の愛した伊豆の海、今度は夏の終りにきてみようと思いながら、わたしは又、透谷集を開いた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

藤村と小諸

小諸は、軽井沢とともにわたしのもっとも好きな高原の街である。信越線特急で二時間あまりという交通の便もあるが、しかしそれ以上に豊かな詩情にあふれ、島崎藤村の想い出を育くんでいることがわたしを小諸へ誘う。

関東の桜が咲きそろう頃、信濃路にはまだ残雪が光り、桜はようやく蕾をほころばせる。碓氷峠の手前——高崎や横川あたりまでの桜は爛漫と咲き、すでに葉桜さえ見せているが、海抜一千メートルの軽井沢から信濃追分、小諸にかけてはようやく春先にさしかかったところである。

この高原の小さな街に市制が敷かれたのは比較的新しく、昭和二十九年からである。人口は今でも五万人ぐらいではなかろうか。あまりにも有名な、藤村の「千曲川旅情の歌」に詩(うた)われた千曲川は小諸の西北の裾をうねるように流れているが、わたしはいつも駅前の小諸城址「懐古園」の山道をくだり、千曲川のほとりに出る。そこは今は、東京電力のダムになっていて、著しく旅情を削がれるが、文句をいってもはじまらないので、なるべくダムは見ないようにして千曲川のほとりを歩くことにしている。季節柄「懐古園」にも人影はまばらであり、川のほ

とりには誰ひとり姿が見えなかった。小諸へは去年の秋以来だが、その時は千曲川は少しも美しくなく、水は濁っていた。が、春先だからであろうか、夕暮れ近い今日は水は濃い緑色を見せ、いかにも多くの詩人や旅人の心をひきつけた千曲川らしいたたずまいを示していた。

いうまでもなく「千曲川旅情の歌」や「小諸なる古城のほとり」を収めた『落梅集』は、藤村の小諸時代における詩集で彼にとっては『若菜集』『一葉集』『夏草』に継ぐ四番目の詩集である。出版されたのは明治三十四年――今から七十年程前だが、たとえば、

小諸なる古城のほとり
雲白く遊子悲しむ
緑なす蘩縷は萠えず
若草も藉くによしなし
しろがねの衾の岡辺
日に溶けて淡雪流る

という詩は、ほとんど誰でも一度はくちずさんだ経験があるだろうし、現代詩には無関心な人でも知らない人はごくまれほど人口に膾炙した。亀井勝一郎は、藤村詩の特徴として「処女崇拝」と「漂泊のしらべ」を指摘しているが（『島崎藤村論』）、彼の詩が、いまだに多くの読者をひきつけるのは、たしかにこの「漂泊のしらべ」は共感するからに他ならない。西行や芭蕉

をもち出さなくとも「漂泊(さすらい)」は昔から日本人の憧れであり、原感情ともいえるものである。わたしが、ひまさえあればふらりと旅に出るのも漂泊への憧れからである。日常の現実では充たされない何かを求めて旅に出る。それは詩情を誘う自然かもしれないし、あるいはもう一人の自分に出逢うためかもしれない。ともかく、人は、時には日常的座標軸から離れて異郷をさすらってみたいという気持に駆り立てられることがある。藤村の詩が心に浮び、小諸へ行きたいと思うのはこういう時である。

藤村が、この小諸の「小諸義塾」という中学校の教師として赴任したのは明治三十二年、彼が二十八歳の時である。もちろん、彼の故郷は木曽・馬籠であり、小諸には明治三十八年まで足かけ七年間滞在したに過ぎないが、ここはほとんど彼の「第二の故郷」とよんでもよい。「懐古園」を訪れたことのある人は、奥の本丸石垣ぞいの先にある瀟洒な「藤村記念館」に保存される彼の遺品や資料に眼を通したであろうし、記念館のさらに奥にある藤村詩碑を眺めたであろう。山深い馬籠峠の南の麓にある彼の故郷・馬籠は長大な『夜明け前』に描かれたように、かつては中山道の宿場として栄えたが、明治になり中山道が廃道となってからは、すっかりさびれた山村となって時代にとり残されていった。したがって、藤村が文学者として大を成さなかったならば、馬籠もまた人々の記憶に残らないさびれた寒村としての運命をたどったかもしれない。そして似たようなことは小諸についてもいえるだろう。藤村自身はあずかり知ら

ぬことだが、彼の名は土産品にも使われ、まさに藤村なくしては小諸もありえないと思われるまで、彼とこの高原の小都市とは深いかかわりがある。

小諸を訪れる旅人は、かならず藤村の詩や、あるいは彼が小諸時代に構想を練った『破戒』を念頭に浮べるだろう。金沢に行けば、犀川と室生犀星を想起するように。

小諸で、わたしがいつも泊るのは千曲川に近い「中棚鉱泉」という宿である。閑静で、千曲川が望め、しかも宿泊料が安く料理がうまいのでありがたい。ここではいつも「にごり酒」を飲み、遠い日の藤村について考えてみる。そのうちわたしも藤村論を書いてみたいが、いつになるかはまったくわからない——。

木曽路ひとり旅

憂き世をしばらく離れ、木曽路を歩いてみたい、というのはかなり前からのささやかな夢であった。「夢」とはまた大袈裟な、と憐笑われるかもしれない。しかし、時間的にも経済的にも余裕のないわたしにとっては、それはまぎれもなく「夢」であり、なかなか実現困難な旅で

あった。それが、この夏の終り、小諸近辺のある小さな町に用事があり、思い切って三日間ばかり木曽から天竜に足をのばしてみることにした。

中央西線で南木曽(なぎそ)に着いたのは八月末の土曜の午後である。しかし、ある程度予測していたことであるが、南木曽駅前には多くの観光客があふれており、そのほとんどは若者達であった。空は青く晴れ、陽射しは強く、いかにも真夏らしい日ではあったが、ときおり吹き渡る風の爽やかさには山国特有の早い秋の気配が感じられた。だが、それにしてもこの混雑はやりきれない。それは『夜明け前』冒頭の有名な一節、「木曽路はすべて山の中である。あるところは岨(そば)づたいに行く崖の道であり、あるところは数十間の深さに臨む木曽川の岸であり、あるところは山の尾をめぐる谷の入口である」のイメージを裏切る。わたしは多分、かなり憎悪的な視線を周囲の観光客に投げかけていたが、同時にこの憎悪感がずいぶん身勝手な感情に過ぎぬことをも意識していた。

南木曽からバスで妻籠宿へ。馬籠とともに木曽十一宿ではもっとも昔の宿場の面影をよく残している妻籠宿を歩くと、一瞬、時代が逆回転したような錯覚に陥る。昔ながらの出梁づくりや竪繁格子の旅籠が軒並みに続き、いくつかの店には木曽の代表的民芸品である桧笠が数多く飾られている。ここも「歩行者天国」を思わせる雑沓で、Gパン姿の若者や家族連れが群れをなしているのが興ざめだが、彼等もわたし同様、木曽に憧れ、都会を脱出してきたのであろう

から苦情をいうわけにもいかない。「奥谷郷土館」にも立寄ってみたが、この豪壮な屋敷は、その昔、妻籠の庄屋であり脇本陣であった林家の住居である。だが、ここにも観光客が群れ、わたしは早々に引上げた。行き当りばったりの旅を好むわたしは、妻籠でバスを降りた時、今夜はここで一泊してもいいなと思ったが、この人混みに厭気がさし、ともかく馬籠まで歩くことにした。おそらく、この分では馬籠も相当の人出が予想され、宿をとることができるかどうか心もとないが、その時はその時である。

木曽路はもちろん、旧・中山道を歩かなければその情緒・醍醐味は味えないが、妻籠――馬籠間を踏破するには時間が遅い。馬籠に向うバスの最終便までには一時間あまりしかなく、膝に持病のあるわたしの脚はあまり長い歩行には耐えられない。そこで、途中からバスに乗ることにして、歩けるところまで歩くことにし、県道を馬籠に向けて歩きはじめた。途中、何回か間道に外れてみたが、そこにはまだ確実に木曽の土の香りが生きている。薄芒(すすき)が茂り、赤蜻蛉が頭上を飛び交う様は、都会ではもうほとんど見受けられない秋の風情だ。間道の外れの農家の庭先に、精妙な細工を凝らした水車が作られてあって、しばらく足を停めて眺めた。それは水車の回転を利用して人形が缶をドラムのように叩く仕組みなのである。人形は数組に分れ、それぞれ違ったリズムを奏でる。何ともいえぬ楽しさであり、わたしはこの水車を作った人の腕前と、それ以上にその人のやさしい心持に感銘した。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com